



協 造 日 報

www.jalc.or.jp

第 447 号

2011 年 6 月 10 日

発行／社団法人日本造園建設業協会（Japan Landscape Contractors Association） 創刊／昭和49年6月1日 〒113-0033 東京都文京区本郷2-17-17 井門本郷ビル2階 TEL03（5684）0011 FAX03（5684）0012

本号の主な内容

2、3面 特集 第5回技術情報共有発表会
4面 【学会の目・眼・芽】第24回 横張 真氏
Safe to fail社会とランドスケープ分野の果たすべき役割
【緑滴】樹の力 西谷勝之
【協会だより】熱中症に気をつけましょう

平成23年度第1回理事会を開催

総会議案など審議

平成23年度第1回通常理事会を6月1日、東京・千代田区麹町の弘済会館で開催した。

冒頭、藤巻司郎会長は「東日本大震災が発生して間もなく3ヶ月が経つが、一日も早い復旧・復興を願わずにはられない。全国の会員からは被災会員への義援金を頂き、会員の皆様から御礼を述べたい。」と述べた。協会では陸前高田市の津波被害を免れた「希望の松」や千葉県内の地盤液状化の被害状況調査などにも対応している。今年11月に創立40周年を迎えるがこの10年



冒頭、藤巻司郎会長は「東日本大震災が発生して間もなく3ヶ月が経つが、一日も早い復旧・復興を願わずにはられない。全国の会員からは被災会員への義援金を頂き、会員の皆様から御礼を述べたい。」と述べた。協会では陸前高田市の津波被害を免れた「希望の松」や千葉県内の地盤液状化の被害状況調査などにも対応している。今年11月に創立40周年を迎えるがこの10年

樹林

緑あふれる安全で美しい国づくり、環境に配慮した本当に豊かさを実感できる街づくりは、国民だれもが願っていることです。

「環境の世紀」「みどりの世紀」といわれる21世紀を迎えて10年余り、「緑」を生業としている私たちの業界は、時代の主役となって追い風に乘っているはずである。

地球環境問題が問われ、地球温暖化・ヒートアイランド現象の課題が進展し、国民の関心が高まり、平成20年の「洞爺湖サミット」では、環境サミットとして大きな話題となりました。環境問題で重要な役割を果たす「緑」を扱う造園建設業も今後の展開に期待を寄せたものです。

しかし、財政再建という難問に取り組み出し公共投資の縮減で厳しい経済環境に入り、わが業界も他の建

境作りに協力頂きたい」とのご挨拶をされた。

その後、通常総会提出議案として平成22年度事業報告・決算報告、23年度事業計画（案）・収支予算（案）及び新法人移行定款（案）等について審議を行い、了承されたほか、「業界実践活動2011決議」（案）、東日本大震災対策本部の動きなどについての報告が行われた。

総支部長等会議

同日総支部長等会議を弘済会館で開催し、公益法人制度改革に伴う新法人移行方針や新法人移行新定款（案）等について審議が行われた。

東日本大震災復興支援緊急集会開く

500人参加

日本造園学会

日本造園学会は5月21日、東京農業大学世田谷キャンパス百周年記念講堂で「東日本大震災復興支援緊急集会」を開いた。学会員をはじめ、民間事業者、学生など500人が集まった。

「震災復興に向けてランドスケープは何をなすべきか？」をテーマに意見交換などを行い、産官学が協働して具体的活動に向けて取り組む認識を共有した。

興支援緊急調査報告、NPO法人冒険遊び場ーせんたい・みやぎネットワーク根本先生プレリーダーの被災現場からの報告、東京都大学・涌井史郎教授の基調報告「東日本大震災復興へのランドスケープ的階梯」が行われた。続いて奈良女子大学・宮城俊作教授をコーディネーターとして、復興支援に向けての視野を代表して「復興に向けた造園建設業の視点」として日造協の対応と新たな国土づくりへの展開について次のとおり発表した。

【1】日造協の対応
①東北各県支部を通じた被災状況の把握
②東日本大震災対策本部の設置

・支援活動の実施（被災地域会員企業への見舞金、全国の会員企業から義援金、技術的支援）
・造園空間の被災実態、防災体制の実態、公園緑地の役割等に関する調査の実施
③連携・協力による調査活動の実施

・宮城県震災予備調査・日本造園学会との連携協力
4月25～4日
・浦安液状化調査・日本緑化工学会との連携協力
4月16日

・岩手県震災調査・日本造園学会・日本緑化センターとの連携協力
4月20～23日
・陸前高田「希望の松」保全対策・日本造園学会・日

当協会からは野村徹郎技術調査部長が、パネリストとして参加し、造園建設分野を代表して「復興に向けた造園建設業の視点」として日造協の対応と新たな国土づくりへの展開について次のとおり発表した。

【2】救援・復旧段階での対応
・現場に即した救援活動（指定管理者としての救援物資提供）
・即応性のある復旧活動（重機、車両、人員の提供）
・エンドユーザーへの細やかな気配り（被災箇所での点検、応急処置）
・技術的支援活動（高田松原「希望の松」樹勢回復への協力）

【3】復興段階での対応
・防災・減災への視点の重視
・「希望の松」樹勢回復への技術提案と他の要請への対応準備
・防災人工の丘公園の建設への技術提案
・公園避難地への提案（液状化緩和対策、避難施設）
・防潮林の植栽基盤整備技術の活用

【4】新たな国土づくりへの展開
・調査結果等の技術基準への反映
・全国組織を活かした防災ネットワークの体制づくり
・学会等との連携・協力によるランドスケープ再生への取り組み

「日造協団体保険制度」加入の
一次メ切りは6月30日（木）です！

損害保険ジャパン代理店または各担当店へお電話を。
（損害保険ジャパン本社） ☎03・3334・9032（6）

造園の領域について思うこと

日造協理事、(株)北海道造園コンサルタント代表取締役

笹本 知



えようと必死で頑張ってきたと思います。

「環境の世紀」にふさわしく、わが業界がしっかりと追い風と捉え活躍できる領域の拡大を、どのような戦略をもって展開していくか、さらなる努力をして知恵と汗をかかなければならないと思います。

そこに、この度の「東日本大震災」

役割を地域住民ばかりではなく、国民全体に周知をはかることも肝要です。平成19年の「新潟県中越沖地震」の際、長岡にある国営越後丘陵公園の果たした役割は記憶に新しいところです。

私たちは、いつも快適な街づくりをめぐる構造的変化をみると、土木産業全般に大きなうねりとなって来ることが必至です。現在の建設産業は「安全と安心」があつての話だと

・建築と2つのカテゴリーに統合され、造園は土木に吞み込まれてしまふ懸念があります。他の専門工事に比べて、永年培われた技術力・団結力、そして市民社会からの認知度が、この大震災に対して造園界として確かな方策を示して対応しなければなりません。

災害時における都市公園の機能的

必然と考えます。

東海地震や南海地震の発生が危惧されている現在、防災公園の位置づけ、仕様のあり方等積極的な提言を行うことが重要です。既存の公園にどのような防災機能を付加できるのか、今の防災機能で十分かといったことも含め、国・自治体及び関連業界と連携した行動を早い段階でとることも肝要です。おそらく被災地内には、慰霊公園的なものとして防災公園が造られ、或るいは復興のシンボルとして、がれきで防災公園が造られることも考えられます。造園に携わるすべての人たちの叡智を結集し、行動を起こすことです。

協会活動は、「業界の夢づくり」と謳っています。この業界で働く若者が、生涯設計が組み立てられ、安心して将来を託せる業界になるよう力を合わせて、さらなる造園の業務領域の拡大を進めていきたいと思います。

特集

日造協 第5回 技術情報共有発表会開催

造園業界の発展に向け

全国の技術情報を「発信」

日造協は4月28日、第5回技術情報共有発表会を鹿児島県東急インで開催した。この発表会は技術委員会技術情報部会が、開催地の総支部・支部事務局及び委員の協力の元に運営している。目的は、総支部・支部の調査研究事業や会員が企業活動等を通じて行った取組み等により得られた技術情報を日造協の共有財産として会員企業の活用資することともに、会員企業の技術者の共有・活用を通じて技術力の向上を図ることである。主催者代表として藤巻司郎会長が「それぞれの技術向上を図り、造園業界をより良くしていただきたい」と挨拶。発表会の後、九州総支部・鹿児島支部主催による交流会が行われた。

校庭芝生化「山梨県での取り組み」

(株)津々美造園
代表取締役 堤明伸氏
協会が社会奉仕活動として何ができるか
・芝生化への啓発活動を推進すること
・子供たちが体感できる緑のステージ作りを行う等を踏まえて、平成18年度より、校庭・園庭の芝生化に取り組んできた。
平成18年・19年に、合わせて9ヶ所の園庭の芝生化を無償で行い、その集大成として平成19年8月、当時日本芝草学会会長、近藤三雄氏(東京農業大学教授)をお招きし、環境と子供を守る校庭芝生化をテーマに講演会を開催。業界や行政関係者含め約400名が出席した。県内ではその後も各地で校庭芝生化がすすめられ、平成20年7月には、テレビ山梨で私たちの校庭芝生化・屋上緑化の取り組みが取り上げられた。
平成22年度校庭芝生化促進事業



駿台甲府小学校開放式

校庭の芝生化が進まない原因のひとつに管理を含めたコストの問題がある。低コストをめざし児童・保護者、近隣住民らが参加して鳥取方式と呼ばれるポット苗による工法が盛んに行われているが、この工法は種類を問わずに緑であれば良いという考え方である。これでは造園家の仕事とは言えないのではないかと。施工場所の面積、現況土壌の構造、成分内容、利用内容、利用者数等を把握した上で、各々の場所の条件に合った施工方法を提案することや植栽基盤作りが大

UAE砂漠緑化中国黄砂対策緑化事業の実績と今後の海外緑化

(株)タイキ
代表取締役副社長 中野格氏
アラブ首長国連邦・ドバイの砂漠内陸部で約13年間にわたる緑化として2000本の植林を行ってきた。
我々は最初に細かい砂を濾過してきれいな水を取り出す濾過機を自社で製作した。その下にコイルドリルと名づけた水圧を調整する装置を付けた。これらの装置で最低でも5mの高差のある砂漠で均等な灌水が可能となった。
砂漠では、水を与え過ぎると気温の上昇と共に地表面に塩の層ができて木が枯れてしまう現象が起きるため、必要最小限の水量で育てるようにした。苗木の生

常に湿潤状態に保ち活着を促進する。
管理については、コスト低減を考え、1年目は施工業者が管理、2年目は学校関係者と施工業者が協同管理、3年目は管理作業を完全に引き渡すことを提案した。
作業手順は植栽基盤の土壌、排水性の調査、土壌改良法の検討、灌水方法の検討を行った。植栽基盤はマサ土が主で、厚さ100mm程度に客土されており現状土を利用することにした。まず植栽基盤表面の浮土を除去、トラクターで耕起耕転後、真珠岩系、ハライト

・バーク堆肥・化成肥料を散布後、攪拌、ティフトンほぐし芝1㎡につき300gで時芝を行う。その後、8mm厚で目土散布転圧を行い、毎朝夕散水を行った。この工法では、これまでと比べてコストも軽減することができた。
以上のような活動を推進する中、2010年12月15日山梨県知事選挙の現知事の政策マニフェストに「県立学校の校庭芝生化を進める、公立小中学校の芝生化を働きかけること」が掲げられるなど成果が出てきている。



アラブ首長国連邦施工現場 (植林5年後)

の季節はマイナス20℃ほどになるので植えた木を土に埋めないで冬を越せない。ここでは、苗の選定が一番力を入れた。1期工事では活着率7割、3期工事では6割程度だったが、我々の2期工事では苗の選定を徹底的に厳しく行った。
1日に1万〜2万本の苗を2千人の職人が一気に植えるので一本一本の管理が無理なため、出来る限り信用できる苗を確保して植え付けることにした。5年経った現在、植林は非常に良

く成長している。
植えた木の種類はアブラマツ、オモテカシワ、ニセアカシア、カエデ。ほかに現地の農民用にヤマモモなど果物のなる木を植栽。我々の2期工事は、苗の選定

やせ地の緑化「草の原を目指して」

(株)多々良造園
代表取締役 多々良健司氏
山口県から、所有する千拓地後の荒地に世界ホーイスカウトジャンボリー(2013年)等の大会でキャンプができるような緑地を作って欲しいと依頼され、日造協と県の造園協会とが共同でプロジェクトを進めている。
大会主会場となる「きらら浜」は、ほとんど工事発生残土で埋まり、調査ではメリケンカルカヤ草が草地を構成していることが判明。専門家によると劣悪な土地にしか生えず、かなりひどい土地とのこと。メリケンカルカヤ草を利用して緑化が出来ないかなどを含めて検討した。
平成20年度は高木と芝生などの地被類について、植え方、管理の優位性等を調査。坪改良(全面改良(1m×1m×1m)、同(1m×1.4m×0.5m)で行った結果、生育不良のものが出たが、原因は下層の不透水層により植穴の底に水が溜まり根腐れが起きていたため、改良方法による生育



きらら浜の植生

の差はなかった。芝生の生育状況は、時芝、張芝などの施工方法の違いより、管理の有無によるところが大きいことがわかった。
2012年に全国植樹祭が開催されることになり「海を育てる森作り」として計画が進んでいる。農林部から早急に緑化をしたいとの依頼があり平成21年度も調査を行った。
芝生は、播種、時芝、ネット芝の比較やカヤ類の利用可能性等を検討。地盤が硬く、面積が広いため掘り起こして改良する工法は行えず、真砂土と砂を盛り土する工法を比較。樹木については、流用土による工法や伐採した竹材で作った酸素供給システムを利用したものなどを比較した。地被は野芝とメリケンカルカヤの比較、掘削地盤、盛土地盤の比較など。また、きらら博記念公園のクロマツの移植実験等を行った。
樹木は、通常の盛土と酸素を供給した盛土での生育状況の違いを県木のアカマツで実験。酸素供給型は生育が進み、通常の盛土は枯れた。発根状況は、酸素供給型のほうが良かった。

からの公害対策も考えたいということ。我々が呼ばれた。また実証段階であるが、石灰灰と独自に開発している微生物を混入して砂漠緑化に取り組んでいる。
一連の調査・研究で我々が辿り着いた結論は、雑草、非植栽植物で草原が作れるということである。出穂時の刈るタイミングなどを管理すれば子供たちへの癒しの場となる緑地を作ることができる。そこで、県に皆が使える原っぱを「草の原」として提案した。今後、雑草、非植栽植物による屋上緑化、植物を利用した放射性物質の吸収、バイオエネルギーとしての利用なども検討する。



会場の様子

総支部	テーマ
関東・甲信総支部(山梨県)	校庭芝生化「山梨県での取り組み」 講演会や園庭芝生化ボランティア、テレビ放映等を通じた啓発活動の様子や、ティフトン時芝芝工法の実施結果など (株)津々美造園 代表取締役 堤 明伸
近畿総支部(大阪府)	UAE砂漠緑化・中国黄砂対策事業の実績と今後の海外緑化 砂漠地における緑化への取組み、並びにその技術について、また、海外における砂漠緑化の需要と今後の取組みについて (株)タイキ 代表取締役副社長 中野 格
中国総支部(山口県)	やせ地の緑化「草の原」を目指して 工事発生土による造成が続いているやせ地を自然環境配慮型の緑地にするための基礎調査や植生実験、雑草の研究などの取組みについて (株)多々良造園 代表取締役 多々良 健司
四国総支部(香川県)	高松市立玉藻公園「庭師の息(いづく) 百年先の枝を見る」 玉藻公園の内苑作庭者 大胡勘蔵氏を訪ねて (株)森造園 代表取締役 森 茂
九州総支部(鹿児島県)	薄層緑化における各種工法の優位性 薄層緑化における各種工法の優位性の比較検討及び効率的維持管理手法の案出を目的に行った試験施工の3年間に亘る追跡調査結果 青楓緑化(株) 代表取締役 岸野 純一
社日本造園学会	造園技術報告集より 歴史空間の保全と活用におけるユニバーサルデザインの推進方策 国営吉野ヶ里歴史公園事務所 所長 井村 久行(発表者) 復建調査設計株式会社 宮迫 勇次、宮崎 保通 第一復建株式会社 箱嶋 斉

高松市立玉藻公園「庭師の一息いづく」
百年先の枝を見る」

(株)森造園
代表取締役 森 茂氏
演題にあげた「庭師の一息 百年先の枝を見る」というのは、高松市の前々市長であった協信夫氏（19



玉藻公園

19（1997）が、造園業界の会合に出席すると必ず話していた事で、自分の政治、都市計画遂行の一番の視点をたとえて言った言葉である。

玉藻公園について

玉藻公園は、讃岐高松藩松平氏12万石の城跡であり、国の重要文化財の建物が園内に多数存在している。現在は香川県造園事業協同組合が指定管理者として管理運営している。緑地に関する概要は、クロマツが1125本、ウバ

メガシを中心としたその他の庭木が905本、同じくウバメガシを中心とした生垣が215本といったような、海岸に近いという条件もあってこういった植生となっている。そのほか、サクラとツツジもある。

現在、三の丸の披雲閣が市民の茶会、展示会などに利用されている。この披雲閣は大正6年に竣工した建物で、伯爵松平頼寿の別邸として建てられた。同じ時期に、内苑の作庭も行われており、総工費2万1731円、東京の庭師大胡勘蔵の作庭とされている。内苑の様式は大飛石、灯籠などを配した回遊式築山枯山

水の大名庭園となっていた。作庭者大胡勘蔵について名前だけが記録として残されているが詳細がわからないため、今回調査を行う事とした。大胡勘蔵のひ孫に当たる人物に連絡を取

り、面会することができた。駒込に住んでいたという重要な情報を得る。さらに大胡勘蔵の墓を発見する事ができた。

大胡氏からは大胡勘蔵の写真が2枚送られてきた。写真には、博覧会副総裁の瓜生外吉、建築設計担当の

薄層緑化における各種工法の優位性

青楓緑化(株)
代表取締役 岸野純一氏

屋上緑化試験施工および追跡調査の助成金を日造協から受け、(株)鹿児島県造園建設業協会と(株)日本造園建

り、面会することができた。駒込に住んでいたという重要な情報を得る。さらに大胡勘蔵の墓を発見する事ができた。

大胡氏からは大胡勘蔵の写真が2枚送られてきた。写真には、博覧会副総裁の瓜生外吉、建築設計担当の

り、面会することができた。駒込に住んでいたという重要な情報を得る。さらに大胡勘蔵の墓を発見する事ができた。

設業協会鹿児島県支部共同で行っている。試験は鹿児島県内産人工土壌と県外メーカー製品との優位性の比較を目的に行われた。使用植物は改良高麗芝、ハマギク、ヒメツル

り、全利用者の6割を占めていた。概ね8割から好意的な意見を得たこと、今後様々な機械の普及が見込まれることから、それに対応するためのコンテンツを整理していくこととしてい



緑化施工された鹿児島市役所屋上

武田五一とともに写っている。もう1枚の写真にも大胡勘蔵が写っているが、他の人物については不明である。しかし、それぞれ模様の違う法被を着た3人の庭師と思われる職人が写っている。公式な資料を調べても、職人の氏名は記載されていなかった。これは非常に残念なこと。

後の世に調べて、「植木職人3名」ではなく、「大胡勘蔵、他2名」というところまでわかったのだから、これをさらに広げて行きたい。

ソバなど14種類を選択した。試験施工の工法は県内産リサイクルソイル工法、樹皮ブロック工法、ヒバソイル工法、ルーフソイル工法、きりしまかる土工法、フリーガーデンソイル工法、スプラウト工法、シラスバル

インボード工法の8つの工法である。県内産リサイクルソイル工法はチップ堆肥とハイライトの混合、同じく県内産のきりしまかる土工法はチップ堆肥とボラ土の混合である。樹皮ブロック工法は木の皮を基板材とするもので、スプラウト工法は棒の中にスポンジ様の人工土壌を入れた工法、シラスバルーンボード工法はシラス土壌を基盤材に使用するものである。

調査結果

地表温度は全体的な特徴として、当初工法によって温度差があったが時間がた

講評

「融合」が共通のテーマ

兵庫県立大学大学院
緑環境景観マネジメント研究科
教授 斉藤 庸平氏

いずれの発表も興味深く、また大変判り易かった。全体に共通したテーマは

「融合」だったと思う。最初の関東・申信総支部では、教育との融合、次の近畿支部は地球環境問題との融合が8割に及び、好意的な意見が多くを占めたことから本格的に導入した。



また、PDFという個人用端末機械での案内実験では50代、60代の方が積極的に利用していることがわか



技術情報共有発表会
交流会を実施

九州総支部・鹿児島県支部主催で
和やかに開催

技術情報共有発表会の後、九州総支部・鹿児島県支部主催による交流会が行われた。主催者を代表して日本造園建設業協会・執行英利九州副総支部長が挨拶した。

講師者の兵庫県立大学大学院教授、斉藤庸平様並びに国営吉野ヶ里歴史公園事務所長、井村久行様をはじめ

つとともに各工法のばらつきが無くなっていた。地表温度を下げる効果が最も高かったのはスプラウト工法であった。葉色の測定では各工法の中で、当初ルーフソイル工法がもっとも葉色が良かったが、これも時間の経過とともに平均化している。基盤材にかかった費用に関する調査では県内産材料を使えば約1/5以下に費用をおさえられることがわかった。

今後は、各工法の安全性・経済性・品質等を比較検討し、個々の現場にもっとも優位な工法と、メーカー製品に頼らない造園技法を案出しなければならないと考える。例えば費用を削減する為に下層に安くて無機質の多い素材を敷き、上層に高価であるが有機質の

多い素材を使えば、コスト削減にもなり、また腐植による土壌が目減りすることも防ぐことにつながる。

風対策も屋上緑化における重要な課題の一つである。風倒防止策として支柱を立てるなどの物理的対応策があるが、杭を打ち込めない屋上緑化の場合、地上部に三角形を組みトラス工法の活用が有用である。

に、先取的に対応するということが大切で、またスケールの大きな仕事でもあり、非常に関心を持った。生活習慣の違いによる国際貢献の難しさもよく伝わっていた。

やせ地緑化と屋上緑化の発表では、困難な緑化条件を克服することにとどまらずその過程にヒートアイランドの緩和やCO₂削減等の環境問題に現実的はどう組み込んだのかについての解説があり、分かりやすく、説得力があった。

そしてレゾナンス（伝達）について。これはかなりユニークな発表だが、百年という大きな単位で、どうやって文化を継承していくのか。非常に大切な課題だと思った。

以上、まとめると他分野とコミュニケーションを取ったり、コラボレーションしたりして融合することによって新たな発展的展開の可能性が示されたと感じた。こういったことを、若い人、特に学生達にも伝えていきたい。

砂漠緑化の試みについて、これからは国境を越えた公災害が問題になる時代



国営吉野ヶ里歴史公園の全景

国土交通省国営吉野ヶ里歴史公園事務所
所長 井村久行氏

歴史空間の保全と活用におけるユニバーサルデザインの推進方策

吉野ヶ里遺跡は、最初に小さな集落だったものが徐々に拡大し、紀元2世紀の前半から半ばにかけては最大40段まで拡大した。平成3年国特別史跡に指定される。4年からは同地を保存しつつ、広く一般公開する

ために国営公園としての事業が決まり、23年に開園10周年を迎えた。

公園全体は117段あり、文化財の保存と活用を図るのが国の公園事業であり、あわせてレクリエーションとしての公園を県が整備するという、国と県の合併事業として進めている。遺構の柱穴等から、そこに弥生時代後期に同時に建っていた建物について調査し、出土した工具からその建物の木製構造を推定し復元した。

公園の植栽計画は平成6〜7年の間に検討された。植物考古学的な手法から調べられた弥生時代の植生について学識者と検討し、植栽計画を作っている。調査

ユニバーサルデザイン
推進の難しさ

吉野ヶ里歴史公園の設計の大前提は当時の国の形を復元するということ。それは現代の安全性や利便性を求める住居空間とは異なる空間であり、現代の基準からすれば不便や障壁だら

け、つまりバリアフリーではないということである。しかし現代の利用を優先すると当時の形と異なる部分も出てくる。そういった相反する部分をどうやってバランスを取るかということ

を念頭に置いて公園を整備運営していかなければならない。

今回の発表内容を一言でまとめると「公園の顧客満足度をいかに向上していくか」ということである。スタッフの配置や通りの名称を使つての道案内など、わかりやすさの改善を図り試行した結果、肯定的な意見が8割に及び、好意的な意見が多くを占めたことから本格的に導入した。

また、PDFという個人用端末機械での案内実験では50代、60代の方が積極的に利用していることがわか

学会の目・眼・芽

第24回

私達は、私達が培った高度な技術を駆使すれば、自然災害を含む社会の様々な変動は吸収でき、その結果、社会の安定はゆるがさない、万一の際にはフェールセーフが働きいかなる危険も安全側に制御できる。そう信じてきました。しかし東日本大震災は、それがいかにはかない幻想であったかを、我々に痛烈に知らしめることとなりました。根源に立ち返り、私達が培ってきた文明のあり方を抜本的に見直し、防災と省資源、省エネルギーを同時に達成する社会に作り変えなければならぬ。そうした機運は、かつてないほどに高まっています。

では、私達は何のような社会を目指すのか。アメリカの景観生態学者Jack Alenbyや、safe to failという概念を提示します。「壊れな（fail safe）」から「壊れても修復できる（safe to fail）」への発想転換のもと、diversity（多様性）、resilience（復元力）、sustainability（持続性）をキーワードとした社会の再構築が必要と説きます。多様な主体から構成され、一時的に壊れてもすみやかに復元でき、その結果、変動を内包しつつも定常状態がダイナミックに維持できる社会。今回の震災は、そうした社会へむけての変革の必要性を、私達に迫るものといえるでしょう。

Safe to fail社会の確立に向け、ランドスケープ分野が果たすべき役割はなにか。私は、地域固有のランドスケープを読んだ資源管理や土地利用、産業のあり方を提示することにあると思います。現代のグローバル化した資本主義は、規格化された工業製品の大量生産・消費・廃棄の上に成立してきました。そこには、地域固有の資源や文化等を活かすという発想がないばかりか、むしろグローバルな規格化を阻むものとして、ネガティブにとらえられてきました。しかしグローバル化は、物資の安定した流通の上に成立するものです。今回の震災は、グローバル化した資本主義に全面的に依存してしまうと、物資の流通が途絶えた瞬間に社会が機能停止してしまうことを、如実に物語るものとなりました。エネルギーについても、供給システムが安定稼働することが前提であり、それが機能不全に陥ると、社会全体に広範囲な影響が及んでしまうことが

Safe to fail社会とランドスケープ分野の果たすべき役割

明らかになりました。

自然災害などの変動に対するレジリエンスを高め、safe to failな社会を実現する上では、巨大化した物資やエネルギーの供給システムをローカルスケールに切り分け、できる限りローカルに需給バランスを図っていく必要があります。その際に大事なのは、地域に産する多様な物的・人的資源を注意深く発掘し、それらを上手に組み合わせ、最大限に活用することです。個々には量が少なく地味だったとしても、それらを上手く組み合わせワイズユースを図ることで、個々には達成し得ない能力を引き出す。そうした発想が重要でしょう。

「地域を読む」姿勢は、まさにランドスケープ分野が得意としてきた取り組み方です。土地利用のあり方について、地域の風土を注意深く読み解きつつ、その地域の資源管理や土地利用、産業にとって最良の解答をきめ細かく導く。今回の震災を契機に、被災地の復興のみならず今後の日本社会のあり方を全般をめぐり、「地域を読む」ことを基調としたソリューションが強く求められるようになるものと思います。自然や文化を読み、見立て、それに従った計画やデザインを志向してきたランドスケープ分野が果たすべき役割は、決して少なくないはずだ。

わが国は、自然災害が多発する風土のもとにあります。そこに暮らす私達は、自然災害により社会が損傷を受けることは不可避との認識のもと、自然災害と上手に付き合い、しなやかに受け流し、致命的な事態に陥らないための備えを、常に社会に埋め込んでおく必要があるでしょう。しかし、そのような備えをすることは、ともすると不効率で様々な負担増につながるといった、後ろ向きな印象を与えがちです。

そうした状況に対し、「エコ」や「スロー」をキーワードとした環境のデザインにより、負担を魅力に変えていく。茶庭や禅の庭がそとであるように、様々な制限を逆手に取り、魅力に転換することもまた、ランドスケープ分野が得意とする発想だったはずだ。災害に備えることを、リバブルで魅力的な社会の形成につなげる上でもまた、ランドスケープ分野が果たすべき役割は少なくないものと、私は思います。

(社)日本造園学会常任理事、東京大学大学院

横張 真

新領域創成科学研究科教授

協会だより

総支部、支部、事務局からの記事を紹介しします

熱中症に気をつけましょう！

炎天下や室温の高いときだけでなく、これからの梅雨時などでも熱中症になることがあります。

熱中症の症状が出ていても本人や周りが気づかないことがあります。症状、予防法、事後の対応などを作業管理者、作業員へ教育することが大切です。

ぜひ日造協の「改訂版造園安全衛生管理の手引き」をご活用下さい。

○価格2500円（税・送料込）（日造協会員980円）で販売中。

詳しくは日造協ホームページをご覧ください。
http://www.jalc.or.jp/publish/

委員会等の活動

○アクションプログラム推進等特別委員会(5月9日) 委員会の基本方針として、中長期に向けてのアクション

事務局の動き

【5月】

9月・アクションプログラム推進等特別委員会
10月・新法人移行検討プロ

シンポジウムの検討に重点を置いて運営していくことなどを審議した。

○新法人移行検討プロジェクト会議(5月10日) 新法人移行に伴う申請書(事業概要)のレビューと新定款の確認を行った。

○総務委員会(広報部会)(5月11日) 「重点実践活動2011決議」、広報日造協造園学会コーナー、広報日造協5月7月号について審議等を行った。

○総務委員会(全国)(5月25日) 平成23年度通常総会議案として、「平成22年度事業報告、決算報告」、「平成23年度事業計画、収支予算」、「新法人移行新定款等」について審議した。

○技術委員会(全国)(5月27日) 本部及び総支部の平成22年度事業報告及び東日本大震災への対応、日造協40周年事業についての報告並びに、平成23年度事業計画について審議した。また、各地域での課題等について意見交換を行った。

○総務委員会(広報部会)(6月2日) 広報日造協特集記事企画、パンフレットの内容、ホームページのスケジューリング、広報日造協6・8月号について審議等を行った。

11月・技術委員会(正副委員長) 総務委員会(広報部会)

12月・運営会議
13月・大阪府支部通常総会

日造協賛助会員の紹介31

タカ才(株)



大分県豊後高田市中央公園

当社はこれまで様々な公園施設製品の企画・設計・製造・販売を通じていきい球と人類の未来に関わるテーマのもと、高度な技術でユニークな遊び、新しいデザイン・機能を追求した新しい製品を続々と開発。公園・公共施設・商業施設・マンションの屋上……。様々な空間にぴったりとまるまる公園施設製品を各種取り揃え、それぞれの設置状況・利用状況にあわせた提案をさせていただきます。また、地域の景観を向上させる製品を作るため、タカ才は専門のデザイナーを起用し企画・デザインを追求、人間工学・都市工学の面でも十分な配慮を行っています。詳しくはHP (http://www.taka-world.co.jp) 東京本社〒108-0002 3、東京都港区芝浦3丁目14の6 03-3452-5505

- 14(社) 第22回全国「みどりの愛護のつどい」
- 18(株) 総務委員会(財務・企画合同)
- 20(株) 監事監査
- 24(株) 東京都支部通常総会
- 25(株) 総務委員会(全国)
- 26(株) 四国建設研修センター評議員会
- 27(株) 技術委員会(全国)
- 30(株) 東北総支部支部長、委員長合同会議
- 31(株) 運営会議

- 1(株) 総支部長等会議
- 2(株) 総務委員会(広報部会)
- 3(株) 日本樹木医会総会
- 12(株) 景観会理事會
- 13(株) 東北大地震被災地激励訪問
- 14(株) 植栽基盤診断士補講習会(近畿総支部)
- 15(株) 技能五輪全国大会台同委員会
- 16(株) 街路樹剪定ハンドブック編集委員会
- 17(株) 建設業適正取引推進機構評議員会
- 23(株) 通常総会・意見交換会
- 24(株) 地域リーダーズ会議
- 29(株) 財団法人花普及センター理事會

『樹の力』

昨年、大晦日から今年の元旦にかけて大雪に見舞われた当地方では、常緑樹を中心に多くの樹木が根こそぎ倒れたり主幹部から折れる被害を受けました。弓ヶ浜半島を象徴する美しい景観を成していたクロマツの防潮林は、5000本以上が折れてしまいました。米子市のシンボルでもあり、天然記念物として指定されている樹齢400年とも言われる名松「潮止め松」のうちの一本が僅かに一枝を残して倒れました。



緑 滴

弓ヶ浜半島の松林については、鳥取県が「白砂青松復活プロジェクト」として作業ボランティアを募り、県内外からの多数の参加者と共に、私たちも苗木の植栽活動に加わりました。

西谷 勝之(山陰緑化建設(株))

また、天然記念物の「潮止め松」は、僅かに一本だけ残った枝を何とか生かそうと地域の造園業界と県で行動を起こしたところ、多方面から様々な形で協力の輪が広がって手当の作業を行うことができた。

この活動を通して、人々がこうした樹木に対して特別な思いを寄れるとともに、人に希望や勇気をもたらす不思議な力に感銘を受けます。

今回の東日本大震災の津波によって消失した陸前高田市の松林で、奇跡に残った一本の「希望の松」を守ろうとする取組みのようすが全国的に報道されていますが、その再生を願うと共に、被災された地域が一日も早く復興することを願ってやみません。